

「新型コロナウイルス感染拡大に関連した実践活動及び研究」成果報告書

1. 実践活動・研究の名称

遠隔での心理学教育に関する需要調査とインフラの構築 —心理学実験実習を中心に—

2. 実践活動・研究の成果

(1) グループ代表者

①氏名： 森 津太子

②所属・職名： 放送大学・教授

③構成メンバー（ 4 ）人

氏名：進藤 聡彦

所属・職名：放送大学・教授

氏名：高橋 秀明

所属・職名：放送大学・准教授

氏名：向田 久美子

所属・職名：放送大学・准教授

氏名：三浦 麻子

所属・職名：大阪大学・教授

(2) 実践活動・研究の成果

本研究は、研究代表者らが所属する大学内の「心理学実験」のオンライン化と、心理学教育をしている全国の大学のオンライン化に関する実態調査の2つからなる。以下、それぞれの成果を報告する。

1. 学内での実践活動：「心理学実験」のオンライン化

(1)経緯

放送大学は通信制の大学で、テレビ、ラジオといったメディアを通じて教育を行っている。そのため、コロナ禍にあっても、ほとんどの心理学教育は従来どおりに継続することができたが、「心理学実験」のみは、実習科目という性質上、これまでも対面の授業として行われてきた。そのため、新型コロナウイルスの感染が拡大した2020年度第1学期（4月～7月）は、全国57箇所学習センターおよびサテライトスペースで開講予定だった

およそ 150 のクラス（1 クラスの定員は 20 名～30 名）がすべて閉講となり、急遽、卒業認定にかかる学生の救済措置として、面接授業科目「心理学実験 1」「心理学実験 2」「心理学実験 3」の代替科目をオンラインで実施することになった。

「心理学実験」を対面以外で実施するのは、放送大学としても初めての試みであったため、実施にあたっては、実習科目としての質を損なわないことを最優先事項と考えた。特に本学では、「心理学実験」の面接授業を履修する学生の大半が認定心理士資格の取得を目指していることから、代替科目も確実に c 領域基本主題の科目とし認定される必要がある。そこで、閉講になった科目の授業内容を、担当の非常勤講師の各々の責任のもとそのままオンライン化するのではなく、「心理学実験 1（Web）」「心理学実験 2（Web）」「心理学実験 3（Web）」という新設科目（それぞれ 1 単位、定員 30 名）として、専任教員がシラバスを 1 から作成し、シラバス（Table 1）がおおよそ出来上がった段階で、日本心理学会認定心理士資格認定委員会に資格対応科目として認定が受けられるかを事前確認した。

2020 年度第 1 学期開講「心理学実験 1（Web）」のシラバスの一部

【授業内容】

心理学の基礎的な実験2種を行います。皆さんはそれらの実験に「実験参加者」として参加し、さらにその結果をレポートにまとめます。行う実験はミュラー・リヤー錯視と概念学習の2つです。受講生の皆さんは、8コマの授業すべてに出席し、2つの実験についてそれぞれレポートを提出する必要があります。

【授業テーマ】

第1回：心理学の研究手法、心理学実験とは

（放送授業教材『心理学概論（'18）』の「第2回 心理学の研究手法」と『心理学研究法（'20）』の「第2回 心理学研究法入門2：研究法概説」を視聴し、課題を提出する）

第2回：ミュラー・リヤー錯視：事前解説と実験の実施

（オンデマンド教材を学習したうえで、オンライン実験の参加者となり、そのデータを提出する）

第3回：ミュラー・リヤー錯視：データの分析

（オンデマンド教材、および同時双方向授業での担当講師からの指導により、データを分析し、図表等にまとめる）

第4回：ミュラー・リヤー錯視：事後解説と結果の考察

（オンデマンド教材、および同時双方向授業での担当講師からの指導、他の受講生とのディスカッションなどによって、データの分析結果について考察する）

第5回：概念学習：事前解説と実験の実施

（オンデマンド教材を学習したうえで、オンライン実験の参加者となり、そのデータを提出する）

第6回：概念学習：データの分析

（オンデマンド教材、および同時双方向授業での担当講師からの指導により、データを分析し、図表等にまとめる）

第7回：概念学習：事後解説と結果の考察

（オンデマンド教材、および同時双方向授業での担当講師からの指導、他の受講生とのディスカッションなどによって、データの分析結果について考察する）

第8回：レポートの書き方

（オンデマンド教材、および同時双方向授業での担当講師からの指導により、実験レポートの標準的な様式や書き方について学ぶ）

注：2020年度第2学期以降は、運用上の都合により授業回の順序に一部変更があるが、授業内容は同じである。

授業形態は、オンデマンドと同時双方向の併用型とし、オンデマンド教材と、同時双方向授業用教材のテンプレートの作成は、各科目担当の専任教員が、同時双方向授業と LMS

を通じた学生への対応（実験レポートの添削・コメントを含む）は、対面の「心理学実験」の担当経験がある非常勤講師が担当した。このような役割分担をすることで、同名の科目を異なる非常勤講師が担当しても、同質の授業が展開できるようにし、3種類の科目をそれぞれ複数クラス開講できるようにした。LMSにはGoogle Classroomを、同時双方向授業にはZoomを用いた。「心理学実験」の最も重要な要素である実験課題の実習は、専用のオンライン実験のサイトを構築し、学生が、これを通じて、1科目につき2課題ずつの実験（心理学実験1（Web）：ミューラー・リヤー錯視・概念学習、心理学実験2（Web）：記憶範囲・メンタル・ローテーション、心理学実験3（Web）：ストループ効果、視覚探索）に参加できるようにした。また、各クラスに1名ずつITスキルと心理学に関する基礎的な知識があるTAを配置し、非常勤講師の補助をした。非常勤講師とTAに対してはオンライン説明会を複数回開催し、またSlackを通じて、情報共有ができる体制を整えた。

(2)実績

2020年度第1学期の7月に非常勤講師10名、TA10名の協力のもと、のべ15クラスを開講したのが最初である。大きなトラブルもなく順調に開設できたことから、2020年度第2学期は数を増やし、非常勤講師14名、TA15名によりのべ21クラスを開講した。2021年度第1学期は、諸事情により、非常勤講師3名、TA3名によるのべ3クラスのみが開講となったが、2021年度第2学期は非常勤講師6名により、のべ12クラスを開講する予定である（TAは未定）。

2. 全国の大学における心理学教育のオンライン化に関する実態調査

(1)背景と目的

前節では本学の活動実践を報告したが、この1年半は、本学に限らず全国すべての大学がオンライン化への対応に追われたと推測される。実際、研究代表者らは、他大学の教員から、遠隔での心理学教育に関する相談を幾度となく受け、放送大学への期待を実感することとなった。なかでも「心理学実験」のオンライン化に関する相談は切実なものだったが、既述のように2020年度の開始時点では本学にも実習科目のオンライン化について何のノウハウもなく、期待に応えることはできなかった。しかし今後は、学内での実績を踏まえ、他大学の心理学教育への支援も可能と考えている。

そこで、まずこの間の他大学の心理学教育のオンライン化の実態を調査すべく、ウェブ調査を行った。調査の対象とする科目には「心理学実験」のほか、「心理学概論」「心理学研究法」を加えた。これらは「心理学実験」と同じく、認定心理士資格取得のための基礎科目（a領域、b領域）だが、講義科目として開講されていることが多く、実習科目である「心理学実験」の開設実態と比較対照することができると考えた。

(2)方法

日本心理学会ウェブサイトにある「心理学を学べる大学」（<https://psych.or.jp/interest/univ/>）等を参考に、全国の心理学教育を実施している大学・学科等を355箇所選定し、ウェブ調査への回答を求める依頼文を2021年8月に送付した（文書での回答も可）。質問は、2020年度の授業開始時期、2020年度および2021年

度前半（4月から7月）の上記3科目のオンライン対応を尋ねるもので、「心理学実験」については、本学で開発したオンライン心理学実験システムの利用を希望するかも尋ねた。その他、オンライン化により実施できなかった実験課題や、オンライン化にあたっての工夫、使用したツールなどについても回答を求めたが、紙幅の都合上、ここでは結果の報告を省略する。

(3)結果

65（ウェブ58、文書7）の大学・学科等から回答を得た（回収率19.4%）。このうち、文書で回答があった2つが、ウェブ調査の回答と統合できないものであったため、有効回答を63とした。大学所在地の内訳は、北海道(2)、東北(2)、関東(24)、中部(7)、近畿(17)、中国・四国(8)、九州・沖縄(3)だった。なお、心理学教育のカリキュラムが認定心理士資格に対応していると回答したのは51（80.0%）、公認心理師資格に対応していると回答したのは46（73.0%）だった。

a. 2020年度の授業開始時期

4月上旬が8（12%）、中旬が4（6%）、下旬が17（26%）、5月上旬が19（30%）、中旬が12（19%）、下旬が2（3%）、6月以降が1（1%）で、4月下旬から5月中旬にかけて開始した大学が多かった。

b. 2020年度の授業形態

Table 1のとおり、いずれの科目も「対面のみ」はわずかだったが、「心理学概論」と「心理学研究」はオンラインのみが多いのに対し、「心理学実験」は「対面とオンラインの併用」が過半数を占めていた。

Table 1
2020年度の授業形態

	心理学実験	心理学概論	心理学研究法
対面のみ	2（3.2%）	1（1.6%）	3（4.8%）
オンラインのみ	18（28.6%）	44（69.8%）	35（56.5%）
対面とオンラインの併用	36（57.1%）	11（17.5%）	13（21.0%）
開講されなかった	3（4.8%）	3（4.8%）	2（3.2%）
わからない	1（1.6%）	2（3.2%）	4（6.5%）
その他	3（4.8%）	2（3.2%）	5（8.1%）

さらに、オンライン授業を行ったと回答した者に対し、その形態を尋ねたところ、Table 2に示すように「心理学概論」と「心理学研究」は「オンデマンド型」が多いのに対し、「心理学実験」は「同時双方向とオンデマンド併用型」が過半数を占めた。

Table 2
2020年度のオンライン授業の形態

	心理学実験	心理学概論	心理学研究法
同時双方向型	12 (22.2%)	13 (24.1%)	10 (20.8%)
オンデマンド型	18 (33.3%)	29 (53.7%)	27 (56.3%)
同時双方向とオンデマンド の併用型	22 (40.7%)	10 (18.5%)	10 (20.8%)
その他	2 (3.7%)	2 (3.7%)	1 (2.1%)

c. 2021 年度前半（4 月～7 月）の授業形態

Table 3 に示すとおり、2021 年度に入ると 2020 年度に比べ、対面を含む授業形態が一般的に増えているが、特に「心理学実験」では「対面のみ」が 3 割以上であった。また、「心理学概論」は依然として 3 割が「オンラインのみ」で実施しているのに対し、「心理学実験」を「オンラインのみ」で行っているのはわずか 6.5% だった

Table 3
2021 年度前半の授業形態

	心理学実験	心理学概論	心理学研究法
対面のみ	20 (32.3%)	8 (12.7%)	10 (15.9%)
オンラインのみ	4 (6.5%)	20 (31.7%)	11 (17.5%)
対面とオンラインの併用	23 (37.1%)	25 (39.7%)	15 (23.8%)
開講されなかった	5 (8.1%)	5 (7.9%)	11 (17.5%)
わからない	0 (0.0%)	3 (4.8%)	4 (6.3%)
その他	10 (16.1%)	2 (3.2%)	12 (19.0%)

オンライン授業を実施した場合の形態は Table 4 のとおりであった。2020 年度と比べ、「心理学実験」では「オンデマンド型」が減り、「同時双方向とオンデマンドの併用型」が増加している。

Table 4
2021 年度前半のオンライン授業の形態

	心理学実験	心理学概論	心理学研究法
同時双方向型	7 (25.9%)	11 (24.4%)	5 (19.2%)
オンデマンド型	6 (22.2%)	20 (44.4%)	16 (61.5%)
同時双方向とオンデマンド の併用型	13 (48.1%)	13 (28.9%)	5 (19.2%)
その他	1 (3.7%)	1 (2.2%)	0 (0.0%)

なお、オンラインで「心理学実験」を実施している場合も、「すべての実験課題をオン

ラインで行っている」は 4 (14.8%) で、「一部の実験課題をオンラインで行っている」が 19 (70.4%) だった。「オンラインで行っている実験課題はない」は 4 (14.8%) だった。

d. オンライン心理学実験システムの利用希望

放送大学で開発したオンライン心理学実験のシステムの利用について尋ねたところ、「利用したい」が 15 (24.6%)、「いますぐには判断できないが、利用を検討したい」が 39 (63.9%) で、ほとんどが利用を希望した。また開発中のものも含め、2021 年度内に実装される実験課題を示し、利用したいものを尋ねたところ、ミュラー・リヤー錯視の 90.7% を筆頭に 9 課題中 8 課題で希望が 50% を超え、高い需要があることが示された。

3. まとめ

実態調査の結果から、コロナ禍の「心理学実験」の対応に多くの大学が苦慮している様子がうかがえた。本年度に入ってから「対面のみ」の授業に切り替えている大学も多いが、そのような場合であっても、本学で開発したオンラインで実験課題が実施できるシステムには、一定の需要があることが示された。この一年半の間に、実験課題のオンライン化の動きは多方面で急速に進んだ。そのような取り組みと足並みを揃えながら、システムの充実化を図り、必要な大学とは共用する仕組みを整えていきたい。

一方で学生が全国に散らばっている本学では、コロナ収束後も、「心理学実験」の一部をオンラインで実施を継続することが期待されている。対面授業と比べ、遜色のない実習科目として常設化するには、オンライン実験システムの整備にとどまるのではなく、授業コンテンツの設計や LMS の活用法等を含む、本科目に係るあらゆる要素をパッケージとして考えていく必要がある。ここで報告した実践活動については、学内のプロジェクトで、受講生へのアンケートや非常勤講師・TA へのインタビューを行い、問題点を洗い出している。今後、それらをもとに、オンラインの「心理学実験」のモデル授業を構築し、提案していく予定である。

2021年 10月 22日

「新型コロナウイルス感染拡大に関連した実践活動及び研究」会計報告書

活動・研究名称	遠隔での心理学教育に関する需要調査とインフラの構築—心理学実験実習を中心に—	
代表者 氏名・所属	森 津多子	放送大学 教養学部 心理と教育コース 教授

1. 助成額	¥450,000
2. 支出合計	¥450,000
(1) 機器・備品	
1) デジタル一眼カメラ	¥89,100
2) ワイヤレスマイクロホン	¥23,100
3)	
(2) 消耗品	
1) バッテリーチャージャー	¥7,010
2) バッテリーパック	¥8,660
3) SDXCカード	¥30,800
4) 詰替テープ	¥503
5) ボールペン	¥132
(3) 旅費・交通費	
1)	
2)	
3)	
(4) 謝金	
1)	
2)	
3)	
(5) その他	
1) Web心理学実験プログラム開発	¥215,875
2) 郵便料金(355通)	¥29,820
3) 間接経費	¥45,000

※ 領収書は各費目ごとにA4用紙に貼付し、通し番号を付けてください。